



2025年度の男女共学化を機に 目的別コース編成や高大連携を促進。 新しい東福岡に期待してほしい

「自分で考え、選択・判断し、 行動できる」生徒主体の学校に

2025年度、東福岡高校は共学化します。時代や社会の変化を見据えたとき、国籍や性別を越えた人と人との関わりのなかで力を発揮する人材を育てることが、「多様性の受容」を教育方針に掲げる本学園の役割と考えたからです。コロナ禍において、学校の意義を話し合うなか、つながることの大切さを痛感したことも背景にあります。6月のオープンスクールでは多くの女子生徒にも来校いただきました。例年と異なる雰囲気にとともに、期待の高さを感じました。本校の印象を聞けば、「元気のある学校」だそうです。司会進行や案内は生徒たちが行いました。好評だった新制服のファッションショーも生徒会主催です。これまでの学校行事は、どちらかというと教員主導で運営されてきましたが、それでは「自分で考え、選択・判断し、行動できる人」という、本校が目指す人物像に反します。そこで生徒会に権限を委譲するなどして、生徒主体の教育体制を充実させてきたのです。

共学化の発表は大きな反響を呼びましたが、学園ビジョン「NEXT HIGASHI 2030」

に基づく学校改革の一つに過ぎません。これを機に、従来の習熟度別コースを目的別コースへ再編。探究を軸とした多様な学びの場を提供することで、生徒の選択肢を増やします。

また昨年度、福岡教育大学、情報経営イノベーション専門職大学、立命館アジア太平洋大学、九州産業大学と、高大連携協定を締結させていただきました。海外友好校も拡大し、海外の大学に進学する卒業生も増えるでしょう。

高校を選ぶことは母校を選ぶこと いつでも戻ってこられる学校に

校長就任を境に授業から離れた私は、機会を見つけては生徒と接点をつくるようにしています。運動部の応援にも時間の許す限り足を運びます。読書を奨励してきたこともあり、情報メディアセンター(図書室)はお気に入りの場所の一つです。貸出冊数に応じて景品が出てくる機械があるのですが、遊び心から「校長と1時間話せる券」を加えてもらいました。生徒と会話する機会は普段からありますが、これをきっかけに、夢をじっくり語ってくれる生徒や、友人には話せない悩みを相談しに来る生徒が増えたことは喜ばしい限りです。

学校説明会ではよく、「高校選びとは、母校を決める選択」と話しています。卒業後も心の拠り所になり得るのが母校です。そう実感する出来事がありました。ある日、たまたま正門の前で佇み校舎を見上げる人物が目にとまりました。声を掛けようとした瞬間、昔の教え子であることに気づき、どうしたのかと聞きました。すると、深刻な悩みを打ち明けながら、ふと母校に足が向いたのだと話してくれました。つらいときに戻ってきてくれたことが嬉しかったし、卒業生にとって本校はこうした存在であるべきだと思いました。

来年度から、このような関係性に女子生徒が加わります。男子校の良さも知っているだけに一抹の寂しさはありますが、それを上回る期待感でいっぱいです。教職員の意識を共有し、個性豊かな生徒たちと共に「新しいヒガシ」をつくっていきます。

まつばら・いさお / 1956年福岡県生まれ。早稲田大学教育学部卒業後、東福岡高校に国語科教諭として入職。エネルギーがみなぎる学校風土のなか、生徒指導などに力を注ぐ。初年度から担任をもち、18年間で6度の卒業を送り出した後、5年間学年部長を務める。2002年、40代半ばで2代目校長に就任。以降、進学実績や部活動の成績向上に尽力。